



俳句のたのしさ

日本人にとって、俳句は親しく固有な文学表現である。

どれほど多くの人が、めぐりくる四季の気配や、日々の
歓び・哀しみを、この五七五のしらべに托してきたことか。

俳句のたのしさは、まず、自分で作るたのしさにある。

句眼の据え方にはじまり、

手垢のつかないことばの創造、一句の完成にいたる、

凝視と単純化のプロセスをくわしく手ほどきし、

〈真相〉〈象徴〉〈しらべ〉〈破調と定型〉

〈字余り〉〈季感〉〈写生〉などの句作の要点を、

鷹羽狩行

二百に及ぶ秀句から解き明かした、
魅力あふれる「読む俳句教室」。



俳句のたのしさ

一九七六年六月二〇日第一刷発行　一九九一年一月二九日第二二刷発行

著者——鷹羽狩行

©Shugyo Takaha 1976 Printed in Japan



発行者——野間佐和子　発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽三—三—二　郵便番号二三—〇二　電話〇三—三九五—二二

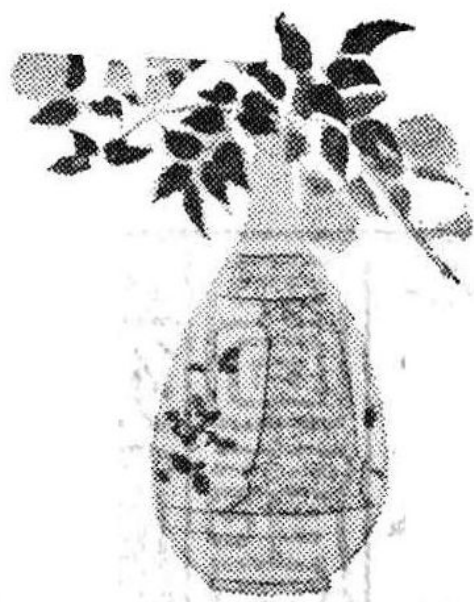
装幀者——杉浦康平＋鈴木一誌

印刷所——凸版印刷株式会社　製本所——株式会社大進堂

ISBN 4-06-115840-6 (定価はカバーに表示してあります)

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、学芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

鷹羽狩行



俳句のたのしさ

講談社現代新書

まえがき

俳句のよさとは、なんでしょう。俳句はうまいことをいう、気がきいている、風流だ……といわれていますが、はたしてそれが俳句のよさでしょうか。

私は、俳句の魅力のおもとは瞬間を永遠のものとする、まことに深い働きがあると思います。もしもその魅力が、たんに洒落たこと、風流なことをいうだけであれば、俳句は一部の好事家のものとなれても、現代に生きる若者や知識人に、じっさいに親しまれているはずはないではありませんか。

さて、人間は一生のうちに、さまざまな体験をしますが、その体験があまりにも強く忘れにくいときには、その思い出を残したいとねがいます。卒業式や結婚式などには記念写真をとる、山を歩いた思い出に押花をつくり、旅行の記念に観光地のスタンプを集めたりするものです。それはみな、過去の貴重な体験をいつまでも保ち、たいせつにして失いたくないからでしょう。

人間には、そのように過去に体験したことをいつまでも忘れず、なにかにまとめておきたい

気持があるものです。それは体験というものが、すぐに消え去ってしまうからでしょう。私達は毎日、たくさん見たり、聞いたりします。いろいろなと行動します。さまざまなことも考えます。ところが、こうした私達の見聞きしたもの、感じたこと、行動したこと、思い考えたことなどは、つぎからつぎへと消えてゆく。たとえば、昨日の夕飯のオカズにしても、なかなか思い出せないものです。ある専門家の話では、たしかに覚えたと思ったことでも、二日後には三分の二を忘れ、一ヵ月後には八十パーセントを忘れてしまうそうです。

毎日の経験がこのように消えてゆくのは当然のこととて、もしも、日常繰り返すできごとの細部にわたって忘れることがなければ、単純なことが頭にいっぱいいつまっても、生きているのもいやになってしまふでしょう。西洋には、穴のあいた壺で水を汲まねばならない地獄の囚人の話がありますが、彼は絶えずこの労苦を繰り返さなければなりません。この地獄の劫罰くわばつに似たものが、われわれの日常生活であり、その無意味な苦しさを片端から忘れてゆくようになっていきます。

しかし、その一方、過去の異常なできごとについて感銘し、それを忘れないように努め、その努め方が異常になることもあります。――異常なできごとといまいったことは、夏休みに見た朝顔の美しさ、窓を打った桐の葉一枚のようなことも含みます。どちらも、ありふれたこと

ですが、折にふれ時にふれ、それを眺めた人の心境や感受性に応じて、忘れがたい異常なできごととなりうるものでしょう。このような自然の美しさのほかに、人の親切に心をうたれたり、（また逆に、この世に人情などはないという痛切な体験も）みな忘れがたい感銘となり、強く記憶されるものです。

このように「異常」なできごとの思い出をたいせつにするのは、けっきょく、思い出が消え失せてしまうと、生活に意味がなくなるからでしょう。平凡な毎日の連続のなかで、いったい、自分はなんのために生きているのか、というわけであります。そこで、ああいうことがあった、こういうこともあったと、生きていることの記録——たしかに生き甲斐がのある瞬間を生きたという証拠——をとどめておきたい気持ちが強く働くと思われまます。

ところで、この生きていることのかげがえのない記録をとどめるには、いろんな方法がありましよう。さきほどあげた押花・スタンプ・写真をはじめ、日記をつける、絵を描く、小説を書く、彫刻する、などなど……。このなかで、事実や事件という外にあることの記録だけではなく、内部に深くひそむ心の感動までを残そうとすれば、文学や美術にまさるものはないでしょう。

ところが、文学にしても絵にしても、素人しろうとには、おいそれと簡単にはできません。文章を書

くには時間がかかり、また絵心があつたにしても大きな絵は即座に描けず、狭い部屋にはうまくおさまりません。いろいろな体験のエッセンス、本質的なものをさらに圧縮して、場所をとらないかたちに仕上げたもの——それが世界でもっとも短い詩型といわれる俳句であります。随筆や小説を間髪を入れずに書くことはけっしてできませんが、すぐれた俳句が電光石火の速さで、まるで神のお告げ（インスピレーション）みたいに、たちまち完成したかたちで一句、口をついて生まれることさえあります。その句を書きつければ、これほど場所をとらない思い出保存法はないでしょう。

このような意味で、俳句はカメラに似たところがあります。そこで、カメラ・ファンの数だけ、俳句を作る人はいるはずともいえましよう。瞬間を永遠に定着することが俳句の魅力の根本で、しかも、それがカメラのような器具の力を借りずに、じまへの眼とペンだけで作れるものです。

してみれば、カメラ・ファンよりも俳句人口のほうが大きいはずですが、事実はそのようにはないと思います。その理由は、文明の利器のカメラがモダンで時流にのったものと考えられ、一方、俳句はいまだに風流などを追う宗匠趣味という時代おくれのものと一般に思われているからかもしれません。しかし、瞬間を永遠のものにする働きに関して、はたしてカメラと

俳句と、どちらが有力でしょうか。

写真にもよい写真があり、つまらない写真があるのと同じように、俳句にも読者を感じさせるものと、駄作があります。よい写真をとるには、カメラの特性をまず理解することが大切であるのと同じく、よい俳句を作るためには、俳句という短詩の特長を知るに越したことはありません。

この本で俳句の魅力を、いろいろな角度から眺めてみましょう。それが読者の俳句の理解の一助ともなれば、このうえない幸せです。

昭和五十一年五月

鷹羽狩行

目次

まえがき—— 3

1 — 発見のよろこび—— 10

2 — 創造のよろこび—— 22

3 — 完成のよろこび—— 32

4 — 単純化の道—— 42

5 — 真相をつかむ—— 52

6 — 金言と俳句—— 62

7 — 象徴の力—— 76

8 — しらべへ音とリズムの魔術—— 89

9	— 古典という完成品	103
10	— 一句の切れ味	119
11	— 破調と定型	136
12	— 字余りの条件	152
13	— 季のはたらき	170
14	— 微妙な季節感	184
15	— 写生の背後	199
16	— 句作の内と外	215
	作者別引用句索引	231

● 本文カット — 白根美代子

1——発見のよろこび

俳句のたのしさの第一といえ、たぶん、発見のよろこびにあるように思われます。俳句は「作る」といい「ひねる」ともいいます。「作る」にしても「ひねる」にしても、その前に、作られるもの、ひねられることがなくてはなりません。そのものとこと、ものごとが、まずあって、それを見いだすのが第一歩でしょう。いいかえれば句の内容を発見するということです。しかし、発見といっても、眼で見つけることにかぎりません。心に感じたことも、頭で考えたことも、すべて発見です。

発見のよろこびが幼時に始まることは、いまさうまでもありません。日々の生活にとって空気はなくてはならないものですが、この空気のありがたさはまったく忘れ去られています。それと同じように、日常生活のなかには、さまざまな驚くべきこと、美しいことなどがあるの



ですが、大人は、もはやそれに馴れきってしまい、感覚が鈍麻^{どんま}して、ほとんど気づきません。ところが子供は大人ほど毎日の生活には馴れていないので、しばしば、そのものズバリ、平凡と思える日常生活のなかからものごとを発見したよろこびを示します。それに耳をかたむけてみれば、大人が思いもかけなかったことをいうので、「アッ」と驚かされることがあります。

コルネイ・チュコフスキーの『二歳から五歳まで』（邦訳名『幼い魂の世界』）という本には、こうした子供の手垢^{てあか}のつかないことばが研究されています。たとえば、中国のピーナツを食べた子供が、

「中国人ってとてもいいひとね。からのなかに二つずついれてくれたんだわ、三つはいつてるのもあったわ」

といい、また、ある子供が三日月を、

「こわれた月」

といったとあります。これらに発見のもっとも純粋な姿を感じるではありませんか。

ところで『にんじん』の作者として有名なルナールに、『博物誌』という本があります。田園生活の眼に映る動物や植物に心を寄せた短篇集ですが、そのなかにつきぎのような作品があり

ます。

蝶

二つ折りの恋文が、花の番地を捜している。

花から花へとわたってゆく蝶の姿を思いうかべての作品ですが、蝶の二枚の翅はねを「二つ折りの恋文」と見立て、その恋文がゆきつく花の番地をさがしているといっています。いずれも、作者の独特な発見です。

ルナールには、ほかに、

驢馬ろば

大人おとなになった兎

蟻

一匹一匹が、3という字に似ている。

それもあること、いること！

どれくらいかというと、333333333333……

ああ、キリがない。

三篇とも俳句とはちがいますが、観察に加えて、考えをめぐらせて得た発見で、切りとり方は俳句的に単純化されています。

俳句に例をとみましょう。

ぜんまいののの字ばかりの寂光土じゃつこうど

川端茅舎かわばたぼうしゃ

ぜんまいのかたちは「の」という字に似ています。「の」の字があつまって、仏のしずかな世界を作っているという句意で、作者の発見のよろこびがそのまま読者に伝わります。

暖あたたかや 飴あめの 中なかから 桃太郎ももたろう

川端茅舎かわばたぼうしゃ

いまはありませんが、むかし桃太郎飴と呼ばれる飴菓子がありました。長い棒状の飴で、舐なめているうちに桃太郎の顔が出てきます。作者の茅舎が俳句を始めたのは十八歳ですから、こ

の作品は子供のものではありません。が、桃太郎飴のなかから桃太郎の顔を発見したのは、純粹な発見——毎日の生活の繰り返しに感受性が鈍くなっていない子供の発見——です。子供の発見であればこそ、このあたりまえのことが奇想天外のこととして大人の心をゆすぶります。そしてこの作品は眼による発見といえましよう。

しかし、人間の体験というのは眼による発見ばかりではありません。考えることによる発見もあるのです。

青蛙^{あおがえる}おのれもペンキ塗りたてか

芥川龍之介^{あくたがわりゆうのすけ}

これは青ガエルが緑色のペンキの塗りたてのように、ピカピカ濡れて光っていることの発見です。しかし、それはあくまでも発想のキツカケです。まず作者が公園で「ペンキ塗りたて」と書いた緑色のベンチを見つける。やがて眼を移して、ベンチのそばの木陰にカエルを見いだす。そしてそのカエルにしみじみ呼びかけ、カエルのこたえを待つかのように、つまりカエルを擬人化^{ぎじんか}した興味さえ加えているのです。

この句には青ガエルを「ペンキ塗りたて」と見立てたところに、作者の考えがはいっているようです。そして、この考えの素朴さが魅力なのでしょう。

このように発見は、眼の前にあるものが、①眼の前にない別のものであるとか、②別のものと似ていることを発見したよろこびなのです。つまり、前に述べたルナールの詩の「アリは数字の「3」であるという、①アリと「3」という二つの無関係なものの一致、それから②子供が「モミジのような手をあわせ……」というように、眼の前にあるものと別のものとの比較、この二つが発見されたものごとになります。また①と②のちがいは、②の場合、「……のようだ」「……のごとし」などのかたちをとることで区別ができます。

水仙や古鏡の如く花をかかぐ

松本たかし

ほととぎすすでに遺児めく二人子よ

石田波郷

蟪蛄は馬車に逃げられし馭者のさま

中村草田男

夫なしに似てうつくしや狐火は

三橋鷹女

螢火や山のやうなる百姓家

富安風生